

哲学研究

第五百三十八号

第四十六卷
第八册

トマス・アクイナスにおける《causa rerum》について（承前）

——Sum. theol. I, q. 14, a. 8.——

山田 晶

五

「神の知は《causa rerum》であるか」という問題は、上述のように「本論文第三章、哲研第五三四号」、「技術者の知は作品の原因であるか」という、より一般的な問題に還元され、更にこの問題は、「自然物の形相はその物のはたらきの結果の原因であるか」という、最も一般的な問題に還元された。そしてこの最も一般的な問題の次元において、この問題に対して次の解答が与えられたのである。

形相は、それが内在しているそのものに形相的存在を与えている「存在の根原」*principium essendi* であるかぎりにおいては、結果に対する原因とならない。しかしそれがはたらきの結果に対する傾向性と結合するかぎりにおいて、「はたらきの根原」*principium operationis* となる。そして自然物の形相は、この「はたらきの根原」であるか

ぎりにおいて、結果に対する原因となる。つまり、形相ははたらきの結果に対する傾向性と結合するかぎりにおいて、結果に対する原因となるのである。I, q. 14, a. 8, c. . . forma naturalis, inquantum est forma manens in eo cui dat esse, non nominat principium actionis; sed secundum quod habet inclinationem ad effectum. [本論文第四章一五節註(三)参照]。

自然物における形相の役割の考察を通してえられた以上のごとき一般的原则(形相の原因的性格についての)を、その特殊な場合としての技術者とその作品との関係に適用すると、「技術者の有する知は、作品の原因たりうるか」という問題に対する解答がえられる[本論文第三章一二節]。すなわち、技術者の有する知は、その知を有するがゆえにまさに彼を技術者たらしめている知として、いわば技術者に「技術者の存在」esse artificis を与えている形相にあたる。しかしこの知は、技術者のうちに彼を技術者たらしめている存在の内在的根原 principium immanens essendi としてとどまるかぎりにおいては、まだ作品の原因 causa artificiatu とはなりえない。それが技術者が作品を造らうという傾向性(これは技術者における作品製作の意志である)と結合するかぎりにおいて、その知は技術者の作品を造るはたらきの根原 principium actionis となる。このように、技術者における作品製作の意志と結合した技術者に内在する知 scientia in artifice immanens が固有の意味で「技術」ars と呼ばれるのである[本論文第三章一〇節註(一)参照]。そして作品をはたらきの結果として生ぜしめ、作品という結果に対してその原因としての役割を果すのは、この技術者における「作品製作への意志」(傾向性)と結合したかぎりにおける技術者の有する形相である。それゆえ、上に提起された「技術者の有する知は、作品の原因たりうるか」という問題に対しては次のように答えられる。——技術者のうちにとどまり、技術者を技術者であらしめている技術者の存在の内在的根原 principium immanens essendi としての知は、かかるものであるかぎり作品の原因とならない。その知が製作への意志と結合するかぎりにおいて、その知は作品の原因となる。——平易なことばで表現するならば、技術者はた

だ技術の知を所有している、というだけでは作品を生ぜしめない。そこに作品を造らうとする意志が結合することによって始めて、その知は作品を生み出す原因となるのである。

ところで、技術者の知と作品との間に存する上記の関係を、次に神の知とその作品たる被造物との関係に適用すると、最初に提起された問題〔本論文第一章巻頭〕に対する解答がえられる。すなわち、「神の知は *causa rerum* であるか」という問題に対しては、次のように答えられるであろう。——神の知は、それが神の知として神のうちに内在し、神のうちにとどまる知であるかぎりにおいては *causa rerum* とならない。その知が、神が「もの」*res* を創造しようという創造への意志と結びつくかぎりにおいて、すなわちその知が「創造」という神のはたらきの根原 *principium actionis* とならなかりにおいて、神の知は *causa rerum* とならぬのである。Unde necesse est quod sua scientia sit causa rerum, secundum quod habet voluntatem constrictam.〔本論文第三章八節註(一)参照〕。

このようにトマスは、「神の知は *causa rerum* であるか」という問題に答えるために問題を一般化し、まずそれを技術者の知と作品との間に成り立つ因果性の問題に還元し、更にそれをもっと一般的に、自然物の形相とそのはたらきの結果との間に成り立つ因果性の問題に還元し、その一般的問題の次元において、形相がはたらきの結果の原因となるためには、形相だけでは足りず、そこにははたらきの結果への傾向性が結合しなければならないことをつきとめ、この一般的関係をその特殊な場合として、技術者の知とその作品との関係にあてはめ、更にまたその特殊な場合として、神と被造物との関係にあてはめ、神のうちに内在する知は、ただそれだけでは *causa rerum* とはならず、その知に創造というはたらきへの意志が結合することにおいてはじめて、神の知は *causa rerum* となると結論するのである。

六

以上のようにトマスは、「神の知は *causa rerum* であるか」という問題に対して解答を与えるために、神の知と「もの」との関係は技術者の知とその作品との関係との類比において考え、更に技術者の知とその作品との関係を自然物の形相とそれはたらきの結果との関係との類比において考えるのであるが、かかる考え方の根底には、神の知と「もの」との関係は、技術者の知とその作品との関係と何らかの意味で共通性を有し、更にまた、技術者の知とその作品との関係は、自然物の形相とそれはたらきの結果との関係と、何らかのより一般的な共通性を有するという思想が前提されている。トマスは神の知と「もの」との因果関係を、この最も一般的共通性の次元にまで還元し、その次元において見出された原則を、その特殊な場合として神の場合に適用しようとするのである。しかしながらかかる考え方に対しては、当然次の疑問が生じてくるであろう。

果して神の場合を技術者の場合と同次元の問題として取り扱うことができるであろうか。また技術者の場合を自然物の場合と同次元の問題として取り扱うことができるであろうか。この三者においては、それぞれ他方を一方の次元に還元することのできない次元的断絶が存在するのではなからうか。もしそうであるとすれば、自然物の場合に見出される原則を技術者の場合に単に前者の特殊な場合として適用し、また技術者の場合に見出される原則を神の場合にその特殊な場合として適用することは、三者の間に存在する次元的断絶を無視し、三者の場合をあかたも同一次元の問題であるかのように考え、あるいは、たとえ三者の間に何らかの相違をみとめるとしても、それはあたかも類に種差を加えて種を形成するように種差的相違しかみとめないことであり、要するに神の場合と被造物の場合、人間の場合同じ自然の場合とを連続的に把えているのであって、かかる把え方にもとづいてえられたトマスの解答は、根本的にまちがっているのではなからうか。

このような疑問を念頭におきながらトマスの解答をもう一度読み直すと、われわれはそのうちに、上記の疑問に対する解答を見出すのである。トマスはこれまでみてきたように、神の場合を技術者の場合との類比において考え、技

術者の場合を自然物の場合との類比において考えている〔本論文第三章〕。そしてこのように類比において考えるということは、比較されるもの相互の間に何らかの共通性をみとめることであり、このかぎりにおいてトマスは、神の場合、技術者の場合（それは人間の場合と違ってよいであろう）、自然の場合のいずれにも妥当する一般的原则をみとめていることはたしかであるが、しかしこのことは決してトマスが、この三つの場合を全く同一次元の問題と考えていたことを意味しない。一方においてトマスは、この三者の間に存在する次元の相違を明確にみとめているのである。そのことをわれわれは、上記のトマスの解答〔本論文第三章八節註（一）参照〕のうちに明確に読み取ることができるのである。

まず自然物の場合と技術者の場合との比較について考えてみよう。自然物は自然的形相によって、まずそのもので「ある」ものとして「ある」という意味での「存在」esseを得る。このかぎりにおいて自然物の形相はその自然物の存在の根原 *principium essendi* である。同様に技術者は技術の知を有し、そのかぎりにおいて彼は「技術者」としての「存在」を得ている。そしてこの技術者の有している技術の知は、技術者であるかぎりにおける技術者の形相であるといつてよい。またそのかぎりにおいて技術者の有している知は、彼に技術者としての存在を与えている技術者としての存在の根原であるといつてよい。ここまでは自然物の形相と技術者の有している知との間には共通性が見出される。

しかしながら共通性はそこまでである。それから先になると、両者の間には相違があらわれてくる。しかもその相違は、同じ類に属する二つの種における相違としてのいわゆる「種差」*differentia specifica* の如きものではない。もっと甚だしい、まさに次元的に区別された者のうちにみとめられる相違である。それはまず第一に、両者における「形相」の在り方における相違として見出される。まず自然物における形相とは（それは「自然的形相」*forma naturalis* と呼ばれる）、その物をその物で「ある」物として在らしめている形相である。そのような形相には、たとえば

トマス・アクィナスにおける《*causa rerum*》について（承前）

「人間」という形相のように、そのものを「人間」という実体 *substantia* としてありしめている実体的形相 *forma substantialis* の場合と、たとえば「熱」という形相のように、或る物をして或る性質のもの（たとえば「熱いもの」）でありしめている附帯的形相 *forma accidentalis* の場合とがあるが、このいずれの場合においても自然的形相は、その形相を有する物をして一義的にこれ、これ、物として自然界に存在せしめているその物に内在する存在の根原 *principium essendi* である。

これに対して、技術者をして技術者でありしめている形相の場合を考えると、何か「技術者」という自然的形相があつて、それが或る人間に加わるとその人間が「技術者」という一個の自然物として自然界に存在するようになるという意味での形相ではない。技術者の有している形相とは、技術者がその知性のうちに有している技術の知にはかならない。すなわち、「技術者」という「形相」を有する人を技術者というのではなくて、その知性のうちに技術的知を有している人を技術者というのである。それゆえ自然物における形相が、自然物の本質の形相的部分をなし、或いはその本質のもの（すなわちそのもの実体）に附加されてこれを完成する一つの附帯性としてあるのに対し、技術者の形相は、まさしく技術者と呼ばれるその者の知性のうちに、その知性によって認識された「知」*scientia* として在るのである。そのような技術の知を有しうるのは、それゆえ、知性的存在者のみである。すべての質料的被造物のなかで、ただ人間のみが「技術の知」*scientia artis* を有しうるのである。

このように、自然物の形相が、その自然物をその物でありしめている形相としてその物の自然的存在、*esse naturale* に属するのに対し、技術者の形相としての技術者の知が、技術者と呼ばれるその者の自然的存在に属するのではなく彼の知性のうちにいだかれていた知として、いわば「知性内存在」*esse in intellectu* を有するという点に、自然物の有する形相と、技術者の有する形相としての技術的知との間に、第一の根本的相違がみとめられる。トマスはかかる形相を、自然物の有する「自然的形相」*forma naturalis* に対して、技術者の知性のうちに存在する「可知的形相」

forma intelligibilis や *forma naturalis*, in quantum est forma manens in eo cui dat esse,……Et similiter *forma intelligibilis*……secundum quod est tantum in intelligente,……【本論文第三章八節註(一) 参照】。これによってトマスが、自然物の場合と技術者の場合とのこの点に関する根本的相違を明確に意識していることはあきらかである。

七

自然物の場合と技術者の場合との第二の相違は次の点に存する。自然的形相は或る物にその物としての存在を与え、その物をその物で「ある」ものとして完成させると、次にはその物と同じ形相のものを自分の外に生ぜしめようというはたらきを起し、そのはたらきの結果として同じ形相のものを自分の外に現実に生ぜしめる。このはたらきに即して考えられるかぎりにおいては、形相は「はたらきの根原」である【本論文第四章一四節】。

このことは自然物においては、実体的形相の場合にも附帯的形相の場合にもいわれうる。たとえば「人間」の形相は、まず第一にそのものをして一個の「人間」であるものとして完成せしめるが、このようにして完成された人間は、単に自分自身が人間として存在するにとどまらず、自分の外に自分と同じ種の形相のもの、すなわち「他の人間」を生ぜしめようとして、そのはたらきによって他の人間を生み出す。それは「生む」*generatio* というのはたらきであり、このはたらきに即して考えるならば、人間の形相は人間を「生む」という「はたらきの根原」である。これは実体的形相の場合である。

同じことは附帯的形相についてもいわれる。たとえば「熱」という形相は、それを受け取った物を「熱い物」として存在せしめ、そのかぎりにおいて「存在の根原」となるが、単にそれだけにとどまらず、現実的に「熱い物」となった物は、自己の有するその熱の形相を他の物につたえようというはたらきを起し、そのはたらきの結果として自分

の外に、自分と似た形相を有するもの、すなわち「熱い物」を生ぜしめる。このかぎりにおいて「熱」の形相は「はたらきの根原」となるのである。

これと同様に、自分のうちに技術の知を有する人間（すなわち技術者）は、単に知を有するというだけの状態にとどまることなく、その知によって自分の外に同じ形相のものを造ろうというはたらきを起し、そのはたらきによって自分の外に何らかの作品を生ぜしめる。その作品との関係において、技術者が有している技術の知は「はたらきの根原」であり、その作品の原因であるといわれうる。以上の点において、自然的形相が結果に対する関係は、技術者がその知性のうちに有している形相が作品に対する関係と共通するといわれうるであらう〔本論文第三章「一節」〕。

しかし両者の類似性はここまでである。これから先を考えると、両者の間には深い次元的な相違があらわれる。

まず自然的形相の場合を考えてみると、自然的形相がその「はたらきの根原」となって同じ形相のものを自分の外に生ぜしめる結果は、そのはたらきの主体となる物と、形相における類似性を有しているが、この場合は、はたらきの主体からはたらきの結果に伝えられる形相は、はたらきの主体が自然的に有している形相である。すなわち、人間は人間を生むというはたらきにおいて、人間が自然本性的に有している形相を他の人間に伝えるのであり、熱い物が他の物を「熱い物」たらしめるといってはたらきにおいて、「熱い物」はそれが自然界において自然的に受けた「熱」という形相を他の物に伝えるのである。その場合、はたらく物からその結果に伝えられる形相は、それによってそのはたらく物が一義的にその形相に決定されているような形相であり、或る形相によって形成された自然物は、同時にそれとは別の形相の物ではありえない。すなわち、人間の形相によって形成された者は、まさに「人間」である者であって、他のもの、たとえば「犬」であり、「猫」であることはできない。

同じことは、附帯的形相の場合にもいわれうる。たとえば「熱」の形相によって「熱い物」である物は、同時に「冷い物」であることはできない。それゆえ自然的形相がはたらくものから結果へと伝えられる場合には、そのもの

はただその一つの形相によってはたらくのであって、他の形相のはたらきをなすことはできない。たとえば人間は人間を生むだけであって、他の動物を生むことはできない。熱い物は熱い物であるかぎり「熱い物」を生ぜしめるだけであって「冷い物」を生ぜしめることはできない。すなわち自然的形相のはたらきの場合には、そのはたらきは一つの形相のはたらきに決定されている。自然的形相のものは、必ずそのはたらきをなし、必ずその形相のものを生ぜしめるのであって（他から妨害的なたらきや状況が加わらないかぎり）、そのはたらきは必ず一つの形相の結果に決定されている。要するに、自然的形相の場合のはたらきは（実体的形相であれ附帯的形相であれ）、一つの結果に対して自然必然的に決定されている、*determinata ad unum effectum per necessitatem naturae*のである。

ところが技術者がその知によって作品を造る場合には事情が異なる。たしかに技術者はその有する形相としての技術知によって自分の外に作品を造る。作品は技術者の有している技術知としての形相を原因とし、その結果であり、したがってその結果は原因たる技術知との類似性を有している。しかしこの場合、技術者の有している技術の形相は、技術者の自然本性を規定している自然的形相ではない。それは技術者がその知性のうちに有している形相である。技術者が作品を生み出す場合、そのはたらきの根原となる形相は、技術者の自然本性を規定している形相ではなくて、彼がその知性のうちに有している形相である。それゆえ彼は、技術者としてはたらくかぎりにおいては、「技術者」を生み出すのではなくて、彼がその知性のうちに有している形相（たとえば「家」の形相、それは「家のアイデア」と呼ばれる）によって「家」を造るのである。自然的形相のはたらきの場合には、はたらく物の形相と、それによってその物がはたらく形相とは同一であり、したがって、はたらく物の形相が一つである以上、それによってはたらく形相も一つであり、そこに生み出される結果の形相も一つである。つまり「一つの形相に決定されている」*determinata ad unum formam*のである。しかるに技術者がその形相によって作品を造る場合には、技術者その者の形相と、それによって作品が造られる形相とは同一でない。技術者は作品を造るはたらきにおいてそのはたらきの主体であり、

自分の知性のうちに「それによってはたらく形相」を持っているのである。はたらきの主体である技術者と、彼が知性のうちに有している技術の形相との間にはいわば一つの距離がある。技術者は自分の知性のうちに、それによって作品を造るべき形相を「眺める」ことができる。技術者は自己の知性のうちに、ただ一つの形相を有するのみでなく、さまざまな形相をもち、そのいずれかを取って他を捨てることもでき、また、作品を造るはたらきをすることもでき、しないこともできる。かくて、技術者がその知性のうちに有している形相によって生み出した作品の有する形相は、自然的形相の場合のように、それを生み出す主体と自然必然的に連関しているのではなく、技術者の知性のうちにいだかれている多くの可能的形相のうちの「一つの可能性の実現された形態にすぎない。すなわち技術家の知はその作品と自然必然性によって決定的に関係づけられていない。この点に、自然的形相の場合と技術者の形相の場合との間に、第二の断絶的な次元の相違が見出される。そしてトマスが上記のテキストにおいて次のようにいふとき、それはまさしくこの相違にふれているのである。cum enim forma intelligibilis ad opposita se habeat……, non produceret determinatum effectum, nisi determinaretur ad unum per appetitum,……【本論文第三章八節註(一)参照】。

それゆえトマスが、この点に関する自然物と技術者との関係を、単に普遍と特殊の関係において把えているのではなく、両者の間に存する次元的相違を明確に意識していることはあきらみかである。

八

自然物の場合と技術者の場合との第三の相違は次の点に存する。自然物においてその形相は、それがその自然物にその形相のもので「ある」ものとしての「存在」esseを与える役割を演じているかぎりにおいては、まだ「はたらきの根原」principium actionis としての性格を持たない。形相がはたらきの根原としての性格を有するのは、その物が自分の外に、自分に似た物を生ぜしめようという「傾向性」inclinatio を起すかぎりにおいてである。この傾向

性ははたらきへの傾向であるが、そのはたらきは何らかの結果を生ぜしめ、結果の存在を自分の外に生ぜしめることによってはじめてその目的を達し、終極するのであるから、その意味で「結果に向かう傾向性」[*inclinatio ad effectum*]といわれる。自然物の形相はただ「存在の根原」[*principium essendi*]であるかぎりにおいては、まだかかる結果に対して「原因」であるということができない。かかる結果に向かう傾向性と結合するかぎりにおいてその原因であるといわれうるのである。

同様に、技術者の知性のうちに存している知という形相も、それが単に技術者の知性のうちにとどまるかぎりにおいては、彼が自分の外に造り出す作品の原因であるとはいわれえない。この段階においては、技術者は自分の知性のうちに技術の知としての形相を持っている、ないしはこのことばのものと意味においてその技術を「心得こころえている」といわれるにすぎない。技術者の有する形相が作品の原因となるのは、技術者が単にその知を心のうちに有している、つまり心得ているというだけにとどまらず、その知にもとづいて何かを自分の外に造り出そうと欲する場合である。

これはつまり、技術者が作品に対する傾向性を起すことである。それゆえ技術者がその知性のうちに有している形相が作品製作への傾向性と結合するとき、その形相は技術者にとってその「はたらきの根原」[*principium actionis*]となり、またその作品に対して、その原因であるという性格を獲得する。このように技術者の場合においても自然物の場合と同様に、単なる形相だけでは「はたらきの根原」とならず、それに結果への傾向性が結びつくかぎりにおいてのみ「はたらきの根原」となり、またそのはたらきによって生ずる結果に対して原因としての性格を獲得する。この点において両者はたしかに共通性を有しているのである〔本論文第三章八、一一節、第五章〕。

しかしながら共通性はここまでである。問題は「傾向性」である。この傾向性が両者においてそれぞれいかなる仕方であり、それぞれいかなる役割を演ずるかを更に深く考察すると、両者の共通性は破れて、両者における次元的断絶があらわれてくるのである。それはいかにしてであるか。

まず自然物の場合における形相と傾向性との關係を考えてみよう。既に述べられたように〔本論文第四章一五節〕、自然物の形相は「存在の根原」と「はたらきの根原」という二つの性格を有しているが、この二つの性格のうちには秩序が見出される。すなわち物はその形相によってその物で「ある」ところの物として存在する。しかるのちに、その物に固有なはたらきをなす。そのはたらきの固有性を決定するものはその形相である。このかぎりにおいて、形相の有している「存在の根原」としての性格はより先であり、「はたらきの根原」としての性格はより後である。

この「より先—より後」*prius—posterius*の關係は、或る自然物においては時間的な次元においてあらわれる。たとえば人間の形相は人間をして人間で「ある」ものたらしめるが、それが完成すると、すなわち人間として自然的に成熟すると、その後自分の外に自分に似た者、すなわち「他の人間」を造るといふはたらきを始めるのである。この場合人間の形相は、まず以てその者を人間で「ある」者として在らしめ、しかる後に人間を「造る」といふはたらきの根原となる。この事態を傾向性に即していえば、人間の形相はまずその者に人間で「ある」ことを完成させようとする努力としてあらわれ（小人が大人に成る過程）、人間としてその自然的存在が完成すると、次には子供を「生みたい」という欲望としてあらわれるのである。

しかし或る自然物においては、この二つの性格は同時にあらわれる。すなわち、或る自然物はその形相を受けるや、その物においてその形相は、その物をその形相の物で「あら」しめる役割を演ずるとともに（すなわち「存在の根原」となるとともに）、同時に同じ形相の物を自分の外に造り出す「はたらきの根原」ともなる。たとえば「熱」の形相は鉄片を「熱き物」であらしめるが、それと同時に「熱き物」としての鉄片は、他の物を同様に「熱き物」であらしめるようにはたらくのである。すなわち熱の形相は鉄片において、「存在の根原」であるとともに「はたらきの根原」となるのである。

このように自然物における形相の「存在の根原」としての性格と「はたらきの根原」としての性格の間には秩序が

あり、その秩序は或る場合には時間的先後の順序として時間の次元においてあらわれるが、必ずしもいつもそうであるとは限らない。それゆえこの二つの根原の性格における秩序は、単なる時間的先後関係ではなくて、より深い次元において見出されなければならない。ではそれはいかなる次元であろうか。

それは完全性の度合 *gradus perfectionis* という次元である。すなわち形相は、まずその形相を受ける物をその物で「ある」者として完成する（すなわち「存在」*esse* の次元において完成する）。このようにして自己の「存在」において完成した自然物は、次にはその形相を有する物に固有な「はたらき」を以てはたらき、自分の外にそのはたらきの結果を生ぜしめる。このことは実体的形相（さきの「人間」の場合）にも、附帯的形相（さきの「熱」の場合）にも共通的にいわれうることである。それゆえ形相は、物を存在せしめるといふ第一の完成の段階において「存在の根原」であり、次にその形相固有のはたらきをなすといふこの完成の段階において「はたらきの根原」となる。そして傾向性はこの第二の完成の段階において形相に加えられる。あるいは、形相の第一の完成の段階と、第二の段階（つまり「存在」*esse* の段階と「はたらき」*agere* の段階）とを結合するものが「傾向性」であるということもできらるであらう（本論文第四章一五節註（一）参照）。

ところで自然物における形相、存在、傾向性、はたらき、その結果の関係を考察すると、そこには次のような特徴が見出される。すなわち、或る物がその形相を受けると、その物は必ず、その形相のものとなる、つまり、その形相の物として存在する（たとえば、人間の形相を受けた物は必ず人間として存在し、熱の形相を受けた物は必ず「熱き物」として存在する）。ところで或る形相を受けた自然物は、かかる物として存在するや、必ずその固有のはたらきに対する傾向性をあらわす（すなわち、人間は人間であるかぎりにおいて必ず人間を生もうという傾向性をあらわし、熱い物は熱い物であるかぎり必ず、他物を熱くしようという傾向性をあらわす）。したがってその傾向性によって起るはたらきの仕方、あり方も、必ず、それに即した仕方あり方であって、別の仕方あり方はありえない。またそのはたらき

によって生ずる結果も、必ずそのあり方のものであつて他のあり方のものではありえない。かくて自然物においては、この形相のものは必ずこの存在であり、必ずこの傾向性をあらわし、その傾向性によって必ずこの仕方ではたつき、またそのはたらきによって必ずこの結果を生ずる。それ以外の存在、傾向性、はたらき、結果は決して生じない。すなわち自然物においては、その形相、存在、傾向性、はたらき、結果は一貫する「必然性」*necessitas* によって「必然的に」*necessariter* 結合せしめられている。そしてこの必然性の根原となるものはその自然物の有する形相であり、したがつて形相はその自然物にとつて、その存在と傾向性とはたらきとの必然的根原 *principium necessarium* である。つまり自然物はその形相の有する必然性によつて、必然的に、かくかくの物であり、必然的に、或る方向に傾き、必然的に、或るはたらきをなし、必然的に、或る結果を生ぜしめるのである（ただし外的な何らかの事情によつて妨げられて必然的結果が生じないこともありうるが、すくなくともそのはたらきの傾向性そのものは必然的に起る）。これがすなわち、「自然物は自然の必然性によつてはたらく」*res naturalis agit per necessitatem naturae*、このことである。

九

これに対して技術者における傾向性は、自然物の場合とは別様の仕方であらわれる。われわれは既に、形相は自然物の場合においては、その形相を受ける物をしてその形相の物で「あら」しめ、技術者の場合にはその形相を有する者をして技術者で「あら」しめるものであることをみた〔本論文第六章〕。しかし自然物が自然的形相を受けるといふことと、技術者が技術の知の形相を受けるといふことは同じでない。両者の相違は、単にその一般的な場合とその特殊な場合との相違というだけにとどまらない。両者の間には次元の相違が見出されるのである。

すなわち自然物の場合には、形相を受けるとは、その自然物自身の自然的存在がその形相によつて形成されること

を意味し、それによって自然物は自然本性的にその形相の物で「ある」ものとならしめられるのであるが、技術者が技術の形相を受けるとは、技術者の自然本性がその形相によって形成されることではなくて、技術者がその知性のうちにその形相を受けることにほかならない。そして知性のうちに受け取られた形相は、すなわち或る事物についての技術的な「知」にはかならない。それゆえ技術者においては、技術の知という形相は技術者の知性においてあり、技術者自身はこの知によって自然必然的に限定されるわけではなく、知性のうちに在るものとしてのその形相を、或る距離を以て眺めることができる。すなわち彼は、自己の知性のうちに存在する知を「考察する」considerare ことができるのである〔本論文第七章〕。

しかしながら技術者は、単に自分の知性のうちに技術の知としての形相を有し、これを考察し眺めているだけでは、まだその作品を自分の外に生み出すことができない。その知にもとづいて、その知の形相のもの（たとえば「家」という形相のもの）を自分の外に造り出そうと欲するとき、すなわち作品製作への傾向性が生ずるとき、この傾向性と結合した形相が作品の原因となるのである。では技術者においてこの傾向性はいかにして生ずるのであろうか。

自然物の場合は、既に述べられたように〔本論文第八章〕、自然的形相は必然的にその形相の物を自分の外に生ぜしめようとする傾向性を生じ、この傾向性によって必然的にはたらきが生じ、またそのはたらきによって必然的に外界に固有の結果を生ぜしめるのであるが、技術者の場合には、その傾向性はその知とこのような必然的な仕方であったりはしない。技術者が作品を造る場合には、自己の知性を眺め、そこに存する事物の形相に注目し、その形相によってその形相の物を外部に造り出すというはたらきへの傾向性を起すが、この傾向性は彼が自分の知性において眺める形相と必然的に結合してはいない。彼は自分の知性のうちに多くの可知的形相を眺めるが、それらすべての形相に必然的に傾向性が結合するとは限らない。彼は自分の知性のうちに多くの可知的形相を眺めるが、それらすべての形相を眺める一つをとり、他のものをとらない。すなわちそれら多くの可知的形相のうちから一つを選び出し、その形相によ

って作品を造ろうとして製作のはたらきを起す。それゆえ傾向性と結合するのは自然物の場合のようにすべての形相ではなくて、技術者がその知性のうちに有している多くの形相のなかで、彼が選んだ、或る一つの形相である。この点に自然物におけるはたらきへの傾向性と、技術者における作品製作のはたらきへの傾向性との間には大きな相違がみとめられるのである。

このように技術者における傾向性は、彼が自分の知性のうちに有している技術の知の形相によって自然必然的に決定されておらず、技術者によって或る知が選ばれて始めて傾向性が成立するのであるから、技術の知の形相とはたらきへの傾向性とは直接的に接続せず、その間に技術者の「選び」electio というモメントが入ってくる。すなわち同じ傾向性であっても、それは自然必然的に或る方向に傾き向かうという意味での傾向性ではなくて、技術者の知性によっていずれに向かうかを決定されてはじめて発動する傾向性として、知性の判断 iudicium intellectus によって媒介されている。このような傾向性は自然本性的傾向性 inclinatio naturalis に対して知性的傾向性 inclinatio intellectualis といわれる。そして「これこそは「意志」voluntas にほかならない。もっとも、人間の「知性」も、これが一つの自然物 res naturalis であるかぎりにおいては、それに対応する目的に対して、すなわち究極目的としての神に対して自然本性的に傾く。このかぎりにおいて意志は「自然本性的意志」voluntas naturalis といわれる。この意志の傾向性を自然的前提として、その上で、またその範囲内において、意志は自分の欲するものを個別的に選ぶ。その選びは意志する主体の自由なる選択と決定に属する。かかることをなしうる意志の能力を「意志の自由決定力」liberum arbitrium voluntatis といひ、かかる能力を有するものとしての意志を「自由意志」libera voluntas といひ、それゆえ厳密にいえば人間の意志はその自然本性的傾向性の側面と自由なる決定能力の側面とに区別して考察されなければならないが、当面のわれわれの課題は「意志」そのものの探究に在るのではなく、自然物の有する自然本性的傾向性 inclinatio naturalis に対して、人間の有する知性的傾向性 inclinatio intellectualis としての「意志」の特

質を示すことに在るから、ここでは特に人間ないし技術者の意志の「自由選択」のモメントに注目する。

では技術者は何によって自分の知性のうちに存する諸形相のうちの或るものを選び、或るものを選ばないのであるか。すなわちその選びの根拠は何であるか。その根拠はいろいろと考えられるであろう。すなわち技術者は何らかの作品の製作のためのはたらきをなす以前に、いずれの形相をとるべきかについてさまざまな条件を考慮し、さまざまな比較的考察を行なうであろう（すなわち「構想を練る」であろう）。しかしそのことはあくまでも考察の次元、思维的の次元においてなされることであって、最後にこの形相を取り他の形相を捨てるといふ決定は、彼の意志の決断によってなされる。それは意志の次元であり、この次元において彼の決定は自由である。すなわち技術者は自由なる意志によって或る形相を取る。このように自由なる意志に結合した形相が、その作品の原因となる。それゆえ自然物においてその形相は必然的にその傾向性、はたらき、結果の産出に連関するのに対して、技術者の場合にはその形相は必然的に結果に連関せず、自由なる意志の決定によって選び取られた形相のみがその作品の原因となる。別言すれば、自然物の場合には、形相からはたらきの結果が生ずるのは自然必然性によるが、技術者の場合には、形相から作品が生ずるには技術者の自由なる意志を媒介としなければならない。この点に、自然物の場合と技術者の場合との第三の次元的相違が見出される。そしてトマスが前掲のテキストにおいて次のようにいふとき、彼はこの点における両者の場合の次元的相違を明確に意識しているのである。Et similiter forma intelligibilis non nominat principium actionis secundum quod est tantum in intelligente, nisi adiungitur ei inclinatio ad effectum, quae est per voluntatem. Cum enim forma intelligibilis ad opposita se habeat……, non produceret determinatum effectum nisi determinaretur ad unum per appetitum,……〔本論文第三章八節註(一)参照〕。

以上において考察された形相―傾向性―はたらき―結果の関係における自然物の場合と技術者の場合との間に存する次元的相違は、次の三点に要約される。

(一) 自然物の有する自然的形相は、その物をその形相の物に形成している、その物の自然的存在に属する形相である。これに対し技術者の形相は、技術者の知性のうちに存在する技術の知としての形相である。すなわちそれは可知的形相である〔本論文第六章〕。

(二) 自然的形相の場合には、はたらく者(すなわち自然物)の形相と、はたらきの根原としての形相は同一であり、そのはたらきによって生ずる結果の形相もまた一つである。すなわち自然的形相の場合には、そのはたらきは一つの形相の結果に決定されている。これに対し、技術者の形相の場合には、技術者自身の形相(すなわち人間としての形相)と、それによって彼が作品を造る形相とは同一でない。技術者は自分の知性のうちに多くの可知的形相を有し、それらの形相を眺めることができる。したがって形相によるはたらきは一つに決定されていない〔第七章〕。

(三) 自然物においては、形相によって生ずる結果へのはたらきの傾向性は、一つの結果に対して自然必然的に決定されている。これに対し技術者の場合、この傾向性にあたるものは彼の意志であり、意志は一つの形相に対して必然的に決定されていない。ゆえに形相が意志を規定するのではなく、逆に意志がはたらきのための形相を自由に選ぶのである。それゆえ結果は技術者によって自然必然的に生み出されるのではなくて、自由なる意志によって製作されるのである〔第八章、及び本章〕。

一〇

以上においてわれわれは、自然物の形相と技術者の形相との次元相違をみたのであるが〔本論文第六―九章〕、次に、神の場合と技術者の場合との相違について考察しなければならぬ。既に述べられたように〔第三章〕、トマスは「神の知は *causa rerum* であるか」という問題を、一般に、「技術者の知は作品の原因であるか」という問題に還元し、更にこの問題を、「自然物の形相はそのはたらきの結果の原因であるか」という問題に還元して考察し

た。かかる考察が妥当するためには、神と「もの」、技術者と作品、自然物とそのはたらきの結果との間に、何らかの共通性の存在することが前提されていなければならない。しかしこの三つの場合を同等に取り扱うことができるか、三者はそれぞれ非常に異なるのではないか、というのがわれわれの提起した疑問であった〔第六章の始め参照〕。この疑問を以てトマスの解答を再検討すると、トマスは少なくとも自然物と技術者との場合を全く同等に扱っているのではなく、両者の間に大きな相違が存在することを認めていることをわれわれは見出したのである。それは単に一般的な場合とその特殊な場合との相違にとどまるのではなく、むしろ次元的に断絶する相違である〔第六章九章〕。

そこで当然次に起ってくる問題は、では神と *res* との関係はどうか。それは一般的に技術者と作品の場合と同等に扱ってよいであろうか。両者の場合は決して同じではなく、両者の間には大きな断絶が存在するのではないかという問題である。このような問題を念頭に置きながらあらためてトマスの解答を読むと、われわれはその簡潔な表現のうちに、神の場合と技術者の場合との根本的な相違が、明確に指摘されていることを見出すのである。ただし『スノマ』におけるこの「問題」に対するこの「解答」のうちにトマスの説明をすべて見出すことは無理である。トマスはこの「問題」〔第十四問八項〕に到る迄に既に「神の知」*scientia Dei* について詳細に述べており、そこでの論述を前提としてこの「問題」に到っているのであるから、今われわれが提起した疑問に対するトマスの解答を彼のことばのうちに読み取るためには、トマスが他の箇所において述べていることがらを以て、われわれが取上げているテキストの理解はおおきなわれなければならないであろう。では神の知と「もの」との関係と、技術者の知と作品との関係との間には、いかなる相違が見出されるのであろうか。われわれは以下にこの問題を、われわれが自然物と技術者との相違を考察するときに手がかりとした三つの点に即して考察することにしよう。

第一に、神の知と技術者の知との関係について考えてみよう。神の知が「もの原因」*causa rerum* であるかが

問われたとき、この「もの」は《res creata》すなわち「被造物」*creatura*を意味し、この《res》の原因としてかわる神は《Creator》、すなわち「創造者」を意味した。そこで上に提起された問題は、「創造者としての神が被造物を創造するとき、神の有する知は被造物の原因となるか」という問題を意味した。そこでトマスは、創造者なる神に対して被造物はいわば神の作品としてあり、この作品に対する神はいわば技術者としてあり、神の有する知は技術者の有する技術の知、すなわち《ars》にあたると考えたのである〔本論文第三章九節〕。すなわち、神—神の知—「もの」の関係を、技術者—技術知—作品の関係との類比において考えたのである。このように考えられた根拠は、神も技術者たる人間もひとしく知性的存在者であることに存する。すなわち知性的存在者は、知性を有しない自然物のように、ただ一義的に与えられた自然的形相によって自然必然的にはたらくのではなく、知性認識を有し、知性のうちに多くの形相を保持し、それらの形相のいづれかによってはたらくことができることに存する。この知性的存在者の段階において始めて、単に自然的なはたらきをするとか生むとかいうことだけではなく、自由なる意志によって何かを「造る」というはたらきがあらわれる。それゆえ神と「もの」との関係が、技術者とその作品との関係との類比において考えられた根拠は、トマスにおいて神が知性的意志的存在者として、すなわちパーソナルな者として扱えられている点にある。このような神の把え方を認めるかぎりにおいて、神を技術者との類比において把えるという見方も承認されるであろう。

しかし共通性はこのままである。更にくわしく神における「知」と技術者における「知」の性格を検討するならば、われわれはそこに大きな相違を、それも連続的な程度における相違ではなく、次元的に断絶したちがいを発見するのである。それはいかなる相違であろうか。

まず、神における「知」とは何であろうか。既に述べられたように〔本論文第一章〕、神の知は神の存在ないし本質と区別された何物かとして神のうちに存するのではなく、まさに神の本質、神の存在そのものである。ただ神が

神自身を他者によって「分有されうるもの」*participabile* として認識するかぎりにおいて神自身のうちに成り立つ知が、諸事物についての神の知なのである。ところで神の存在は無限であるから、その存在が他者によって分有されうる状態もまた無限である。したがって神のうちには、無限に多様な事物についての知が成立することになる。しかし神においては、これら無限に多様な事物についての知は、神の知性のうちに、知性の実体に附加された状態として、あるいは知性によっていだかれる事物についての個々の概念として内在するのではない。神は最高度に単純であって、その存在、本質、認識は全く同一のものである。その意味で神の知は一つである。ただその知の内容に即していえば、神は無限に多様な事物を、それらが神の存在を無限に多様な仕方分有するものとして認識すると考えられるという意味で、神のうちには無限に多様な事物についての無限の知が存在するといわれうるのである〔本論文第二章〕。

その意味で神は無限に多様な事物を認識しているのであるが、神の外に無限に多様な事物がまず存在して、その存在する事物を神が認識し、そこからそれらの事物についての知を受け取るわけではない。神の知は事物の存在に先立つのである。事物が存在するから神がそれを知るのではなく、神が知るから事物は存在するのである。事物がこの世界に存在するに先立って、存在すべき事物についての知は永遠から神の知性のうちに在るのである。しかし神の知性のうちに先在し、既に神によって知られている事物が、すべていつかこの世界に存在するようになるとは限らない。この世界に過去・現在・未来のいつか或る時に現実存在するようになる事物は、神の知性において既に知られている事物のうちのごく一部にすぎない。神のうちには、この世界にかつて存在したことなく、現在も存在せず、未来にも決して存在しないであろうもの、その意味で永遠にこの世の目の目を見ることなく、永遠に神のふところのうちに隠されている事物の知も存在する。それらのものは現実には決してこの世界に存在することがないから、その意味では「非有」*non entia* といわれるが、しかしそれは決して「無」 *nihil* ではなくて、神の知性のうちには存在して

いるのである。それらのものは、事物によって「分有されうるもの」*participabilia*として、すなわち、神の「存在」*esse*の他者による分有可能な形態として神の知性のうちにある。したがって「分有されうるもの」とは「神の存在の分有可能性」として在るものであり、それはつまり「存在しうるもの」*esse possibilis*（これを簡単に「可能的なるもの」*possibilia*という）にほかならない。

現実はこの世界に存在するものは（過去に存在したもの、未来に存在するであろうものをも含めて）すべて、本来このように神の知性において「分有されうるもの」*participabilia*なし「存在しうるもの」*possibilia*として知られていたものが、現実には「存在するもの」として「現われたもの」*existere*〈*existens*〉*existentia*（この語の本来の意味において）であり、それはすべて神の無限の「存在」*esse*を、それぞれに固有なる有限の様態において分有しつつ現実の世界に「存在する」*existere*ものである。トマスが「もの」というのは（すくなくとも現在のわれわれの問題に関するかぎりにおいては）、そのようにして現実の世界に存在するところの「存在するもの」*res existens*にほかならない。

一一

これに対して、技術者の知とは何であろうか。創造者たる神の被造物に対する関係は、技術者たる人間の技術作品に対する関係に等しいといわれる。Sic enim scientia Dei se habet ad omnes res creatas, sicut scientia artificis se habet ad artificiatam.〔本論文第三章八節註（一）参照〕。創造者たる神がその知性のうちに有している「存在しうるもの」*possibilia*の知によって「存在するもの」*res existens*を創造するように、技術者たる人間は、その知性のうちに有している技術の知によって、その知にかたどった作品を現実の世界に造り出す。技術の知は「*ars*」といわれ、その知によって物を造る人間は「*artifex*」といわれ、その知によって造り出された作品は「*artificiata*」といわれる。

このかぎりにおいて創造者↓神の知↓被造物と、技術者↓技術の知↓作品との間には類比の関係がみとめられるのである〔本論文第三章一〇節〕。

しかしながら共通性と類似性とはここまでである。いま技術者の有する技術知としての「知」を、前章において考察された神の知としての「知」と比較すると、そこには大きな相違が見出される。それは単なる程度の相違ではなくて、次元的に断絶する両者の間にもとめられるちがいである。

技術者はその知性のうちにいだいている知をすべて現実の世界に造り出すわけではない。技術者も或る意味において自分のうちに無限の可能的なるものの知をいだいているということができよう。そのうちのいずれを取りいづれを捨てるかは技術者の自由である。このように、技術者が自分のうちに、それによって作品が造り出される無限の可能性を有している点において、技術者がその知に対する関係は、神がその知に対する関係に似ているように思われる。

しかしながらよく考えてみると、技術者の知が無限であるということ、神の知が無限であるということは決して同じ意味ではない。現実的に無限なる神のうちに存する無限なる分有可能性としての神の知は、現実的に無限である。これに対し技術者は人間であるかぎり有限であり、その知性も有限であり、したがってまたその知性に含まれる知も、まさにその知性の有限性のゆえに現実的には有限であるといわなければならない。技術者の知が無限であるとは、その知が作品として技術者の外に造り出される以前においては、その知は外的存在に対して「未だ決定されていない」*nondum determinata ad unum effectum*、すなわち「未限定」*indeterminata* であるという意味で無限であるにすぎない。ここに神の知と技術者の知との間に、第一の根本的な相違が見出されるのである。

ところで技術者はその知性のうちに、いかなる仕方でもその知を得るのであるか。トマスは人間知性のうちに本有観念をみとめない。知性は本来、その上に何も書かれていない白紙である。それゆえすべての知は外界から得られるのでなければならない。知性がそのものを認識するに先立って既に世界に存在しているものから、人間はすべての知

を受取るのである、技術者の有する技術の知といえども例外ではない。たしかに技術者はその知によって、それ以前には世界に存在しなかった作品を造り出す。その意味で技術者もまた神と同様に無から有を創造する者であるように思われる。しかし技術者はその作品のモチーフを、根原的にはすべて外なる世界から受け取るのである。技術者の獨創性はこのようにして世界から受け取られたさまざまな形相をその精神の中で自由に分解したり組み合わせたりして、その結果その精神のうちにあらたに成立した可能的なるものの知をもとにして、外界にその形相の物を造り出す点にあるといえるであろう。しかもそれを組み合わせる仕方は、一見いかに奇想天外に見えようとも、根本においては「もの」*res* そのものの法則に従っていないなければならない。さもなければいかに立派な船を造っても海に浮べることができず、いかに素晴らしい飛行機を造っても空を飛ばせることができない。船も飛行機も人間がこれを造る以前においては世界に存在しなかった。人間の技術がそれを世界に存在せしめたのであり、その意味においてこれらのものはたしかに技術者の創造であるといえよう。しかし船を浮べる法則、飛行機を飛ばせる法則そのものを技術者はいかなる技術を以てしても造り出すことができない。返ってそれらの法則は「ものの法則」として「ものの世界」*rerum natura* に存在していたのであり、技術者はこの世界に新しい作品を造り出すために、まず以てその「ものの世界」からその法則を学び取らなければならないのである。

この意味において、技術者の有している知はすべてこの「ものの世界」つまり実在の世界から直接にか間接にか取られたものであり、技術者のうちに在る知はすべて、実在の世界に存在する事物を原因として、それによって知性のうちに生ぜしめられたものである。これに対して神が有している事物についての知は、神がその外に存在する「もの」から受け取ったものではない。それは無限なる神が神自身を知る無限の様態におうじて神自身のうちに無限に生み出されるものであり、したがってそれは神の外なる何らかの「もの」を原因として神のうちに生ぜしめられたのではなく、神における諸事物の知の原因は神自身にほかならない。そして神自身を原因として神自身のうちに生ぜしめられた知

を原因として、神の外にすべての「もの」は造り出されるのである。

このように、神の知性のうちに含まれている諸事物についての知は、神そのものを原因としていわば神自身のうちに無限に湧き出すものであるのに対して、技術者の知はたとえそれがいかに多様であり豊富であり独創的であろうとも、根本においては實在の世界から取られたものとして、知性のうちに「原因されたもの」としてあるという点に、創造者なる神の知と、技術者たる人間の知との間に、次元的に断絶する第二の相違が見出されるのである。

一一一

神の知と技術者の知との第三の相違は次の点に見出される。技術者が何かを造る場合、技術者がその知性のうちに有している知は、そこに造り出される作品に対して「原型」ないし「範型」*exemplar* として在る。技術者が何かを造るとき、彼は何らかのプランに従ってそれを造るのであり、そのプランは彼の知性のうちに作品に先立って存在する。

ところでそのプランをもとにして外界に作品を造り出そうとするとき、ただちに問題になるのは材料である。それは造り出すべき作品の種類により、また技術の知の性格におうじて多種多様であるが、いずれにせよ技術の知が外化されて一つの作品として現実の世界に造り出されるためには、何らかの材料を必要とする。それは技術者が作品を造り出すための質料的条件である。ところで技術者は自分の有する技術の知に対して或る種の自由を保持しているが、質料的条件に対しても同様に或る種の自由を保持している。すなわち彼が自己のプランを實現し何らかの作品を造り出すためにいかなる材料を選ぶべきかは彼の自由の自由に属している。そこには鉄を選ぶか石を選ぶか。また、この石を選ぶかあの石を選ぶかという選択の自由が存在している。その自由の範囲内において技術者は自己の知にもとづいて、その知を原型として作品を質料的世界のうちに造り出す。彼はこの質料的世界においてそこから材料を取り、そこに

自己の好む技術の知を以て形相を与え、自己の知をその材料において具体化し、自己の知をその材料において対象化し一個の「もの」としてこの世界に存在せしめるといふ仕方ではたらくのである。そのかぎりにおいて彼は、自分の処理しうる質料的世界において自由であり支配者であり、その領域において無から有を造り出す創造主の位置を占めているともいわれうるであらう。

しかしながら、よく考えてみると、彼の質料的世界に対する支配力は絶対ではない。絶対でないどころか、きわめて限られていることが知られる。技術者は彼に与えられた材料に対してはこれを自由に処理し、自由に形成することができるが、与えられない材料に対してはかかる自由を有しない。鉄が豊富に与えられている地方においては、技術者は鉄を以て多くの作品を造ることができるが、大理石が与えられていないならば大理石の作品を造ることはできない。それゆえ技術者の自由は、これを質料的条件の側面から考えてみるならば、与えられた材料の範囲内における自由であり、有限である。では質料を与える者は誰であるか。それは技術者自身ではなく、彼にとって他者であり、この与える他者を還元してゆくと、結局彼がそのうちに生き、そのうちに存在し、そこにおいてはたらく実在の世界としての「もの」になるであらう。すなわち、技術者の自由は、その質料的条件の側からみても、「もの」によって規定され、制約されているのである。

このことは、別の側面からみるならば、次のようにいうことができる。すなわち技術者の知は、彼が現実の世界に造り出す作品に対して、作品がそれにもとづいて、ないしそれを手本として造られる「範型因」*causa exemplaris* としての原因の性格を有しているが、そこに現実¹に造り出された作品に対して、その作品の存在全体(ないし全存在) *totum esse* の原因となることができない。すなわち、いかなる技術者といえども、自分の知性のうちに有する範型としての「知」だけを原因として、それによって自分の外に、その形相のみならずその素材をも含めたその作品の全体を造り出すことはできない。彼はその知を範型としてそれにかたどって造られたものを外界に存在せしめるために、

外界に既に存在しているもの、その意味で技術者のはたらきに先立つもの、すなわち実在する「もの」の存在を作品の現実化のため必要とするのである。この「もの」は彼に与えられた質料であり、この質料なしに彼は何も造り出すことができない。それゆえ彼の造り出す「はたらき」は、始めに考えられたように、その全存在を外界に造り出す意味での「創造」*creatio*ではなくて、既に存在する質料としての「もの」に何らかの形相を与えるはたらき、すなわち「形成」*formatio*にすぎない。技術家によって造り出される作品はその意味で、彼の「被造物」*creatura*ではなくて、いわば「形成物」*res formata*にすぎないのである。

これに対し、神がその知によって「もの」を造る場合、神はその造るはたらきに先立って既に世界に存在している「もの」に対してはたらきかけ、神の知性のうちに存在する知を範型としてそれによって形成するという仕方である。「もの」を造るのではない。神の知は、まさに「もの」の存在そのものの原因なのである。神の知が、それに先立って神の外に既に存在する「もの」を原因としてそれから受け取られた知ではなく、神の自己認識の無限なる内容として、いわば神の純粹思惟によって神自身のうちに無限に湧出した知であったように「前章」、神がその知をもとにして神の外に「もの」を造る場合にあっても、神はその知を範型因としてそれを形成すべきいかなる質料的なるものも存在を必要としない。神はいかなる質料から造るのでもない。それが「無からの創造」*creatio ex nihilo*の意味である。それは「無」 *nihil*と称せられる「何物か」が「在って」、それ「から」造るということではない。もしそうならば、それはもはや「無」ではなくて、「無」という名で以て呼ばれる何らかの「有」となってしまふ。「無からの創造」とは、「無」という「もの」から造るということではなくて、何物からも造ら「ない」ということであり、神は「もの」を造るにあたって自分の外にいかなる「もの」の存在をも前提しないということである。

では何物から造るのでもない神にとって、そのものの知を範型として「もの」を造るとはいかなることであるか。それはその「もの」に、その「もの」の全存在 *totum esse* を与えるということである。技術者はその作品に或る

意味での存在を与える。しかし全存在を与えない。なぜならば技術者の作品は、彼がそれに作品としての存在を与える前に、既に何らかの「もの」として在ったのであり、この「もの」の存在なくしては作品の存在は実現しないからである。技術者はたしかにその質料的存在に形相を与えることによって作品の存在を完成するけれども、しかし質料的存在は作品の全存在の一部を成しており、それは技術者が造ったものではなく、返って反対に、技術者がそれを仕上げるための前提として存在する。それゆえ技術者はその作品にその全存在を与えるものではない。これに対して、その創造においていかなる存在する「もの」をも前提しない神が「もの」を造る場合には、その「もの」の有している全存在が神によって与えられるのでなければならぬ。その場合、その「もの」の全存在はあくまでもその「もの」の全存在であって、他の「もの」の全存在ではない。それぞれの「もの」は、それぞれに固有なる仕方で全存在を持つ。いわば、それぞれの「もの」にそれぞれ固有なる全存在の量がある。その量はそれぞれの「もの」においてそれぞれ有限である。そしてそれぞれの「もの」の存在の有限性を規定する原理となるものは、神のうちに存するその「もの」の知である。神は、それぞれの「もの」について神が有している「知」にもとづいて、それぞれの「もの」に適合した全存在を与える。それとともに、神のうちにその「もの」の知として存在していた「もの」は、それ独自の存在を得て、実在の世界に存在するもの、すなわち *res existens in rebus natura* となる。これが神が「もの」を創造するということである。このように、技術者の知は作品に対して或る意味で存在の原因となるが全存在の原因とはならないのに対して、神の知は、神によって創造される「もの」の全存在の原因となる。これが神の知と技術者の知とを次元的に区別する第三の点である。

一三

以上においてわれわれは、神の知を技術者の知と区別する三つの点を順次に考察してきた。次にそれを要約し、そ

これらの区別が結局において、神と人間とのいかなる区別に起因するものであるかを見ることにしよう。

第一の区別は次の点に存した。技術者の有している知は、或る意味において無限である。すなわち技術者が、作品の製作のためにその知のいずれか一つを選び、それに決定するまで、作品の原因として未限定にとどまっているという意味において無限である。しかしそれは端的な意味においては有限である。なぜならば、それらの知を包含する技術者の知性は、まさにそれが技術者たる人間という有限なる存在者の知性としての有限性をまぬがれることができないからである。これに対し神の知は端的なる意味において、絶対に無限である。なぜならばそれは無限なる神の思惟の無限なる思惟内容にほかならないからである。そして神の思惟が無限であるのは、神の思惟 *intelligere* は神の存在 *esse* にほかならず、しかも神の存在は無限であるからである〔本論文第一章〕。

第二の区別は次の点に存した。技術者の知は、或る意味において技術者自身によって彼の知性のうちに創造されるものである。なぜならば技術者は、自分のうちに存するさまざまな形相を自由にさまざまな仕方で組み合わせ或いは分離して、外界に存在したことのないさまざまな「もの」の形相を自らの知性のうちに産出するからである。しかしそれは無条件に技術者の創造であるとはいえない。なぜならば彼がさまざまな仕方で組み合わせ、あるいは分離して彼の知性のうちに新たな形相を産出するために必要でかつ前提条件となる要素的形相は、彼の知性の創造ではなくて外界の「もの」から取られたものだからである。すなわち技術者のうちに存する知はその根原においては彼自身の創造ではなくて、外界の「もの」を原因とし、それから原因されたものである。これに対し、神のうちに存する事物の知は、神の外に存在する「もの」から取られたものではなく、神の自己認識において無限に神の知性のうちにいわば湧出するものである。神においては、その知は「もの」によって原因されたものではなく、返って反対に、神の知が「もの」の原因となっているのである〔第一章〕。

第三の区別は次の点に存した。技術者の知は或る意味において、彼がそれを形成しようとする質料的世界に対して

自由なる支配力を有する。すなわち彼は自分の処理しうる範圍の質料的世界を、自分の有している知にしたがって自分の思うままに形成することができる。しかし彼は、無条件にそのような支配権を質料的世界に対して持っているわけではない。なぜならば、彼が処理しうるもの世界は彼に与えられたものであり、それを彼に与える者は彼自身ではなくて、彼にとつては外なるものである「もの」だからである。これに対して神は、その知によつて創造する世界に対して絶対の支配権を有する。じつさい神は「もの」を造るために、いかなる質料的なるもの存在をも必要とせず、それぞれの「もの」に、それぞれに固有なる全存在を与えるのである〔第一二章〕。

以上、三点に要約された神の知と技術者の知との区別は、これを更に要約するならば、次のことに帰着するであろう。技術者の知は、それを含む知性についてみても、それがそこから取られる根原についてみても、形成すべき質料についてみても、「もの」の有限性によつて限定されている。なぜならば、技術者の知がそのうちに含まれる彼の知性はそれ自体一つの有限なる「もの」であり、その知性のうちにその知を供給する根原となる世界も、知性の外に存在する有限なる「もの」であり、また技術者がそこにおいて、またそれを材料としてその知を作品に形成すべく彼に与えられるものも、有限なる「もの」であるからである。これに対し神の知は、それ自体すべての「もの」を存在せしめる存在の根原として、「もの」の世界に対して絶対の支配権を有し、いかなる意味においても「もの」によつて規定されることなく、返つて反対に、すべての「もの」を絶対的に規定する。すなわち「神の知」は「ものの尺度」*mensura rerum* となる。ここに、「もの」との関係において、人間たる技術者と神たる創造者との根本的区別が示される。

では、「もの」との関係において示される人間と神との根本的区別そのものは、どこから生じてくるのであろうか。それは神がすべての存在者のそれぞれにとつてそれぞれの全存在の原因であるのに対し、人間は神によつて原因された「もの」の一つとして存在するものにすぎないということに起因する。更に神が全存在の原因となること自体の根

拠をさぐるならば、結局において神が「存在の純粹現実態」actus purus essendi であることに帰着するであろう。存在の純粹現実態である神においては、神の存在はただそれ自身が「存在する」esse というにとどまらず、まさに存在の「現実態」actus なるがゆえに「存在せしめる」efficere esse という「はたらき」agere の原因となる。しかし神は、光の現実態が他者に光明を与え、熱の現実態が他者を熱くするような仕方、自然必然的に「もの」をして存在せしめるのではない。存在の純粹現実態である神は、存在のすべての完全性を自らのうちに最高度に包含するがゆえに、存在の最高完全なる在り方として知性認識の現実態 intelligere においてある。それゆえ神は知性認識者が存在をつたえる仕方で「もの」にそれぞれの全存在を与える。これはつまり神が知性のうちに有する「もの」の知にもとづいて「もの」に固有の存在を与えることにほかならない。その意味において、神においては思惟することが存在することであるとともに、また、思惟することが「もの」を存在せしめることとなるのである。トマスが『スンマ』上記の箇所において、神の知が「ものの原因」causa rerum となることを説明して、「神はその知性によって『causa rerum』となる。なぜならば神の存在はその知性認識にほかならないか。」Deus per intellectum suum causat res, cum suum esse sit suum intelligere.〔本論文第四章八節註(一)参照〕というとき、彼はこの簡潔な表現において以上のことを意味しているのであると思われる。それゆえトマスが、神と被造物との関係を技術者と作品との類比において語るとき、両者の関係を単に連続的に考えているのではなく、この二つの場合における次元的断絶を明瞭に意識していることはあきらかである。

(未完)

(筆者 京都大学文学部〔西洋哲学史〕教授)